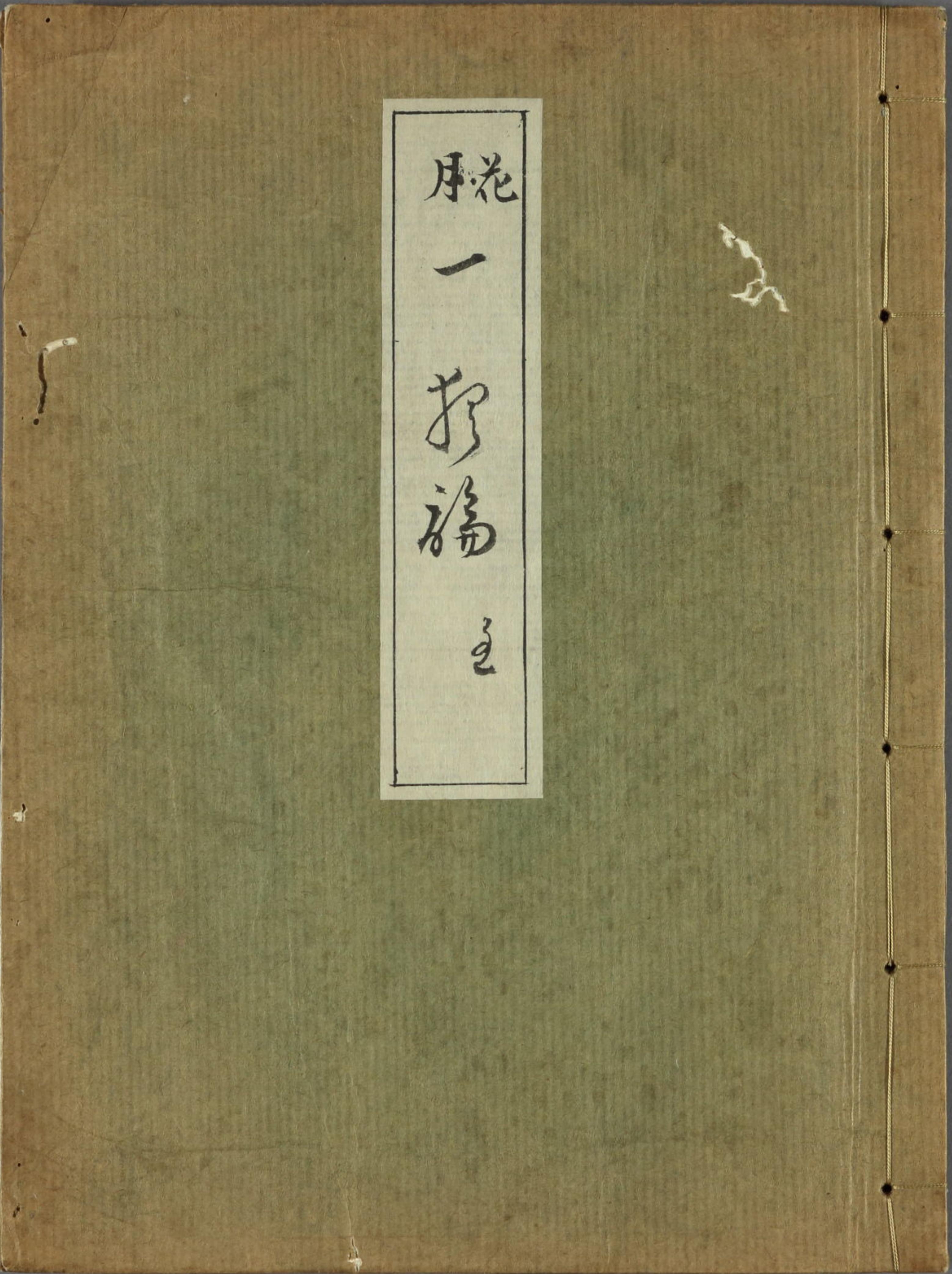
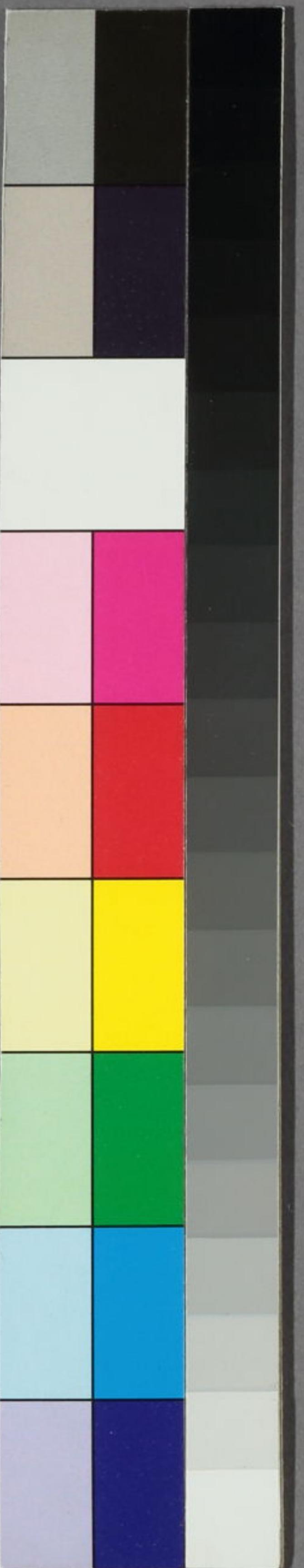


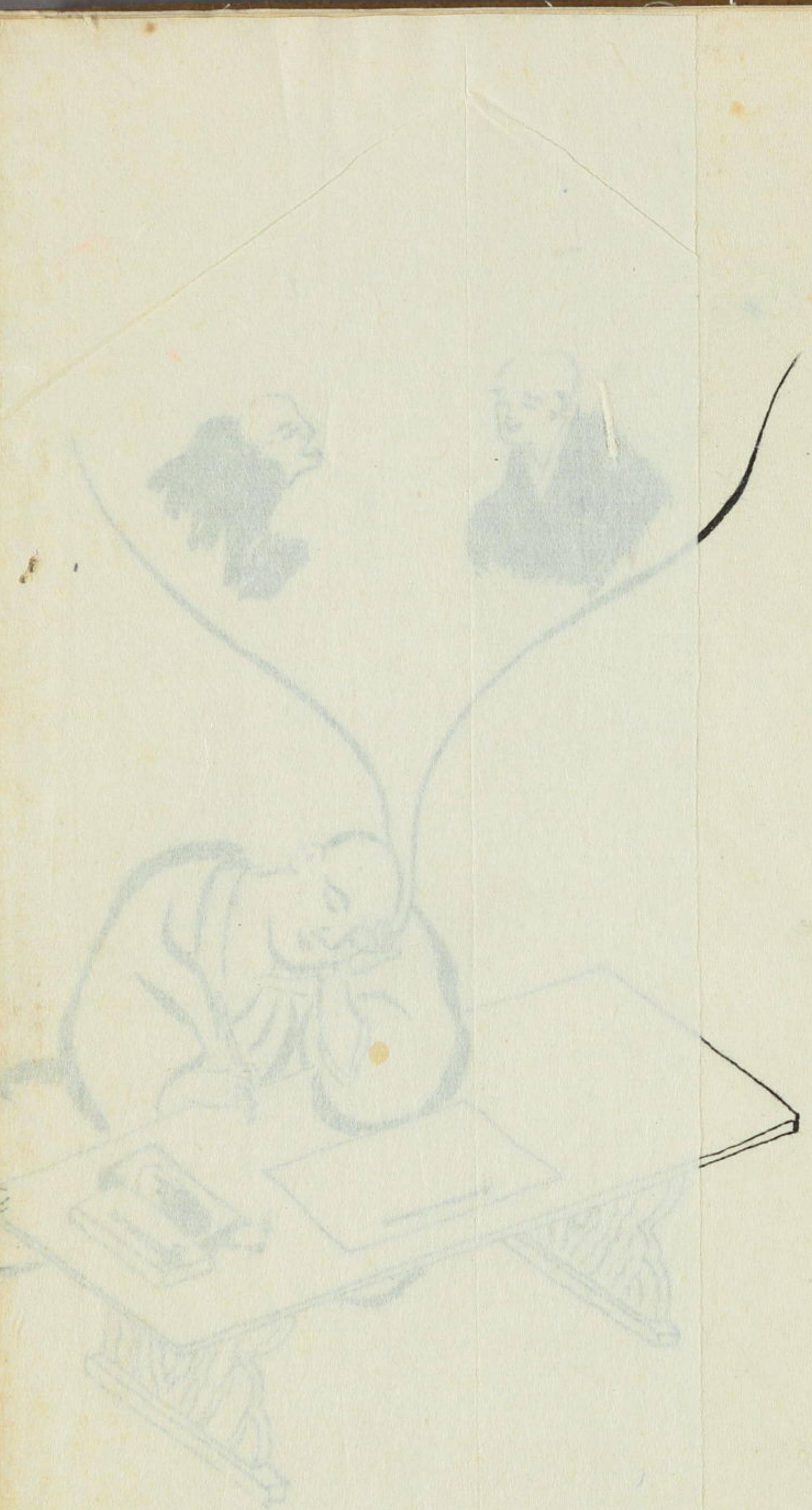
月光  
一  
打  
福  
之

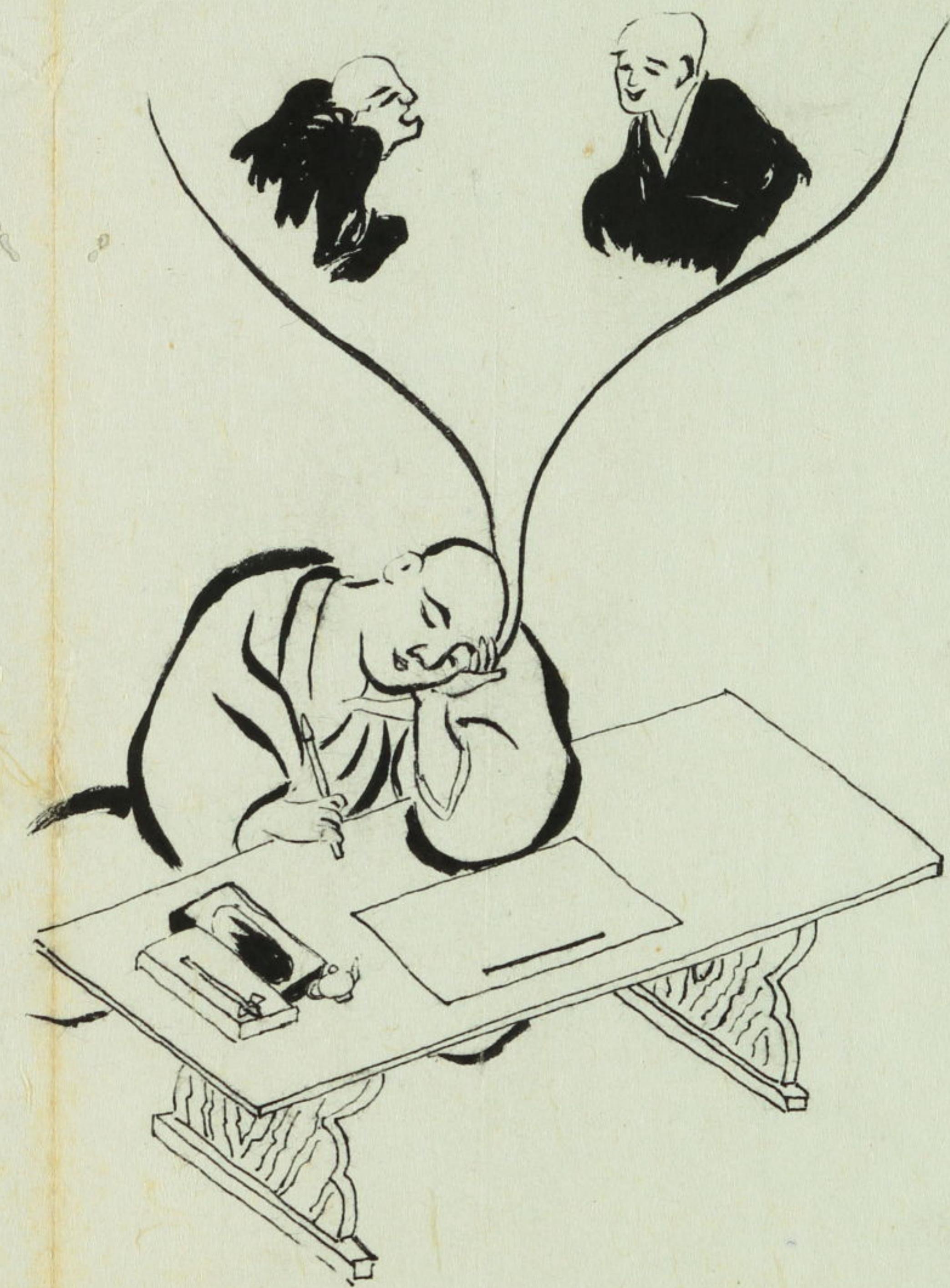


140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6

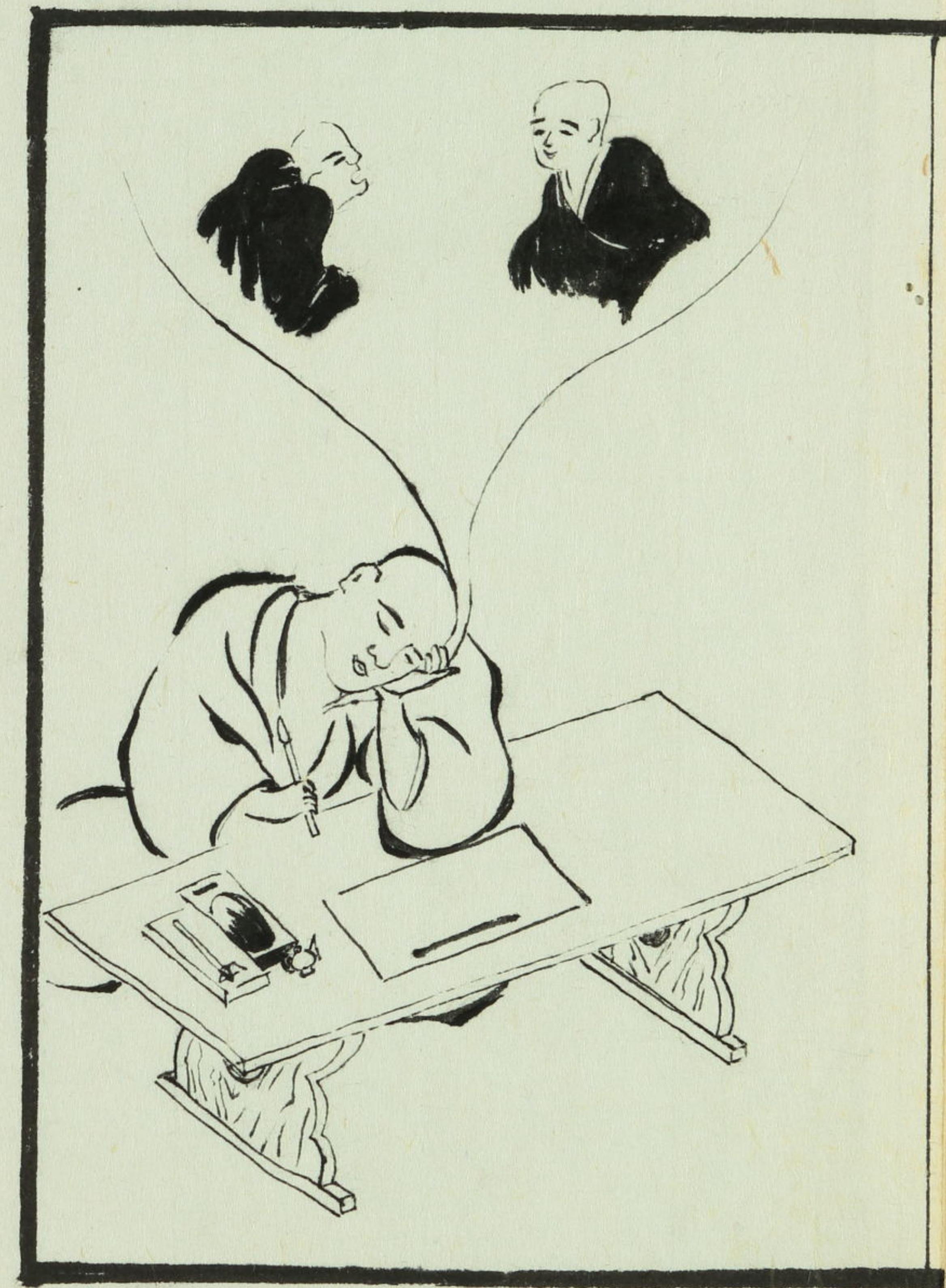
9 140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6

太平會合





さととあまく  
樂むよ  
おつむと  
おちやくねりせよともわりよひよ  
れきよとくの事よ  
ぬも乃あるく  
若物あくとかくふりかせて顎  
を投げりよ  
折せうあんやまはるをあ  
んやまはるよちてを



あはれと云ふのを北山をう  
うか海と乾川乃店とあれ  
ア冉を禁く多ふ病体を  
禁あらゆり候るの事す可  
ありませ小糠の養糠のあらわ他  
をも見るに驚くふるつまゆのゆ  
りよ人を捕ふれを喜ぶしるる  
まづれにはあざめの宿

トト予第一夜の宿する所  
あれとちよつてまづ宿すか心付  
侍の主事く羊のりよき  
ひ哉を重んじあき羊を  
御よし申ゆてまこと笑ふ  
人をまかみ申とせんるの  
跡とゆるをもどり耶  
あもあらぬも

四ノ和

西遊記卷之二日蒲園子序

水滸傳見風序



一日湖南本曾寺のあゝりとお衛一ノ木 加賀  
壁の告白あるに境不坊と裏出寺トヨウシキをねがふ  
小ゆきもすゝせらむ芭蕉塚オハシヤマツチをねまは老  
かり雄才とすゞ見れづのめ達師アリシいり  
あれかは高タカりと生トコのゆヒと望ム  
あ詠アヒすかず一歌の福庸ハクヨウとれあ  
一侍イチジにはひびひハビヒへ海シマの池イシ自ヒテはを  
月ツキや師シともちく風雅ブンガの溢ヨリ奥アメニを詠ヒテる  
更ほほあくをぬす愁クモリまれときとに師  
旅リョクにかよ載スルの確言ハクゴンかくしをひそむれ

不<sup>ハ</sup>され、後の志と補<sup>ハ</sup>せとめすよ前と採  
ま途に一あ<sup>ハ</sup>砌とゆあつテぬ

明和甲申夏六月

美佐村

一  
角例  
一  
來誼亭訓のれ、妻は、考加子<sup>ハ</sup>所あり  
一問著中にある。其勺<sup>ハ</sup>下ふやの名を記す  
ハミ<sup>ハ</sup>妻は、嫁<sup>ハ</sup>所あり<sup>リ</sup>これとおり  
不<sup>ハ</sup>すと見<sup>カ</sup>れ<sup>リ</sup>とおも覺<sup>カ</sup>めあるの。

二

一  
狼鶴  
後<sup>ハ</sup>師池月材<sup>ハ</sup>議論<sup>シ</sup>往聽<sup>ス</sup>  
他月材<sup>ハ</sup>くよいが翁の雪<sup>シ</sup>前<sup>シ</sup>師<sup>ト</sup>議論  
來<sup>ハ</sup>まとあり君見<sup>ス</sup>や東都<sup>ト</sup>涼<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup>わざに  
頻りに<sup>ハ</sup>翁<sup>ト</sup>破<sup>ハ</sup>戸<sup>シ</sup>とりふまと弘<sup>モ</sup>と是  
才<sup>モ</sup>れう<sup>シ</sup>の能門<sup>ト</sup>の邪<sup>シ</sup>哉<sup>アリ</sup>ほや、いつ<sup>モ</sup>  
翁<sup>ハ</sup>師<sup>シ</sup>若<sup>シ</sup>既<sup>シ</sup>知<sup>シ</sup>り余<sup>ち</sup>て鍋<sup>ト</sup>鱗<sup>モ</sup>尾  
すり<sup>シ</sup>みは迄<sup>シ</sup>安樂精舍<sup>ト</sup>張<sup>ス</sup>玉文明社<sup>中</sup>の三<sup>三</sup>子  
片歌<sup>ニ</sup>お<sup>シ</sup>若<sup>シ</sup>歌<sup>シ</sup>きのそ<sup>ト</sup>め<sup>リ</sup>——草のそりうち  
引<sup>シ</sup>奇<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>あ<sup>リ</sup>書<sup>シ</sup>と懷<sup>シ</sup>す<sup>シ</sup>身<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>れ

評を乞ふ小余毫に纏き篠山閣主た篇との旅宿  
この記述漫りよ古人を哉一人大も當安と欺き巧  
に加害と誣いく己の妄量を售じむるの招牌よ  
一より富士山人乃雅情を失ふのゝあくに却す  
邪見の端とありきとと知ふさうあを自喜とあ  
まく益するトモトと詔す評は歎へす黙トと  
あれと置そりニシ子のあくれへむト芭蕉の門  
まよおひと持の毛骨とはくとあた鳴臥人及  
いは一消ノ日奈の群籍と看讀一と今新かと  
せりゆうと忽ち已う名と改め祖力徳を越一別に

一家とあつて後進と乍爾せんとする庵疏を失  
生りかんむを失れと辞さうとまう云々ニシ子既  
予彼、誠祖の罪あるとと知ふなへ我他の評とまむ  
名患の臣の忠言不孝乃子不孝疏をまう全く信隻  
來つま事中の種未だ往來ともに豈あく空年華の  
苦悽、開落とも不空ふれぬ非理諭牛の是非は是  
非ともに非あくめ少くも少と較びト薪と用ひ渴  
を止ふ水漸と以ますとあんを制して夫りぬ今  
仁者歎美す所もあに何ふうから故く歯痛は  
ふに足さると禁かれ葛庵をり一ひつゝ凌寧

の中止まく再せり所の仇譜頃は一箇の風味ありま  
ゑく進門の氣格よからぬより余りあらへおれと廢  
しものあつきあふ年会續アヤシとありとくか影の美貌  
きつげう進柏の狗内を賣しむことすり及んと忽ち  
知ふからぬ鸚鵡すくえ寺俳家の口先破せりとぞ  
直あきらめは既或人のソラモハニカレモと加の  
希因能の大明もとう糟とくひ舗つすされよ醉い  
まゝ進家の醜とてにもなまううちよ忽ち吐延  
今ハ俳門と出まか歌のモ歌と吸いあもふく口脣と譽  
ふ口脣のあらゆ津ねをあつれり是る單紙とおのう

恭枝とくとくあれを商ふあくやがふむさとう  
きふ根ふますとく風雅の吉面目をなすとおれ古  
既よ異端よ陸一畢まくかんの御中の邪善とよ  
トク阿く彼を彼より置くわの樂」とお  
ふうせ俳諧の本さあくの彼にすすむう又  
即ち進の時乃は澤あり

他月材えいかれ既よ進品と破一俳門と折  
はさにか影の棟を阿ケセとすおの俳門より  
くあれと桂勘七と名へ在かくと本家と集  
ハれものあらや吾濟持の器とはされ

うんとも思ひうへ  
師あへや柱斬せざる

鏡志師あくあんすれおぞ怒むの色をあくや余ら  
俳諧と業とせましに者、激勵の言とまけとも  
奮發するやうあらわすか  
知かやいうよがの調達  
興のくハ正道と拂り一も身士、首若どす  
持のは遠よき事にゆきと絃たの暢矢もよく薦翁  
を破すとす薦翁あんの害捕、あふんの雨すすに下せ  
の人とありてやく比地の喜び諧のい体だどく  
詠きよよんとも傳承あくされうゑに隣あく風  
のそく扇き草のとく便りすりくよ老ります

三四

月くよ聞ひとうきぬ今やあれと羨みすおよ一家  
をふきんとくア歌ひうねゆといはるの天熱風  
雅の六あをを待ちあそく在るのたを領へく  
高都の象頭ヨリの五はと説くとも名利万  
一良軒よりあらわのねと失ひ遠民中の畸人  
ありうる俳諧達元の醜名と玉載よ残さんと詔と  
贈なうと  
やれあす薦門のあす朝夕一これ残  
いよか歌の新説となすとぢやかくともゆ決すれ  
薦門のすこふうへ群り演習先生後方大人と  
猪せんかの天熱、新説ふ人の上もよく歸仰せ

も聖日雲子同體のよ——いかれがありまことに知ふし  
間子役に一すまんも又則ち其扇の鎌澤ありとの  
あれの謂ありさと子やがれいま名を斤部と改む  
を古體と化りあ

いつとふの堅魚杓と漕り見る  
さまといふいと傳まりぞきゆ

まとわふ事より又神のまに

ひとりあく自慢されど大方の猪君お持しくぬると  
併へうつりますまことに唐人の五言古詩と仰  
く古詩とまふを明の滄溟う耶すといへば

一五

唐の古詩と唐の古詩とまあと選詩と比され  
ら殆と鳥跡の異と見ふ今後をうけまよわう。後  
太白行歌中くあれと日本古の古雅あつに比すれば  
殊よりれ沒文清あつは卒のれ似すそあゝはの  
あくや已うまの短便とづく古雅の深井と汲ませ  
と歎せんよりも在より其家の口生似とへ

ノ一重喜よるゆく渡うれ

ありと口號と居ては是をかべて取めまことに  
近體の御の度と申ゆつてくふときへ右と  
ケルと改せとよのおくとも眞門にあらの

さると一發一々と行戻のいりへと後らむとあは  
せぬのめそ所よ志とくと一伽度よ鼻を覆ふす  
蒜に左鼓も右もおのれゝゝ稟識の事とあすま  
せれむ

幅幅ら樹よさうきみの清いわ

お乃つ倒よ懸まくとて却く往還の人を剛  
ト歩りくと笑ふかおゝしす 佛道の普闍含と  
出づて割の衆引ひゆきものもをれ松葉う草す  
とあり一五百むふ釋子の教事すまほや

他日坊云く涼僧もと希因大明ふとの糲粕と

乞食すとら悪口うへられまふりち禪寺と買ひの  
喰とびとあひとりといん

続る師あく薬を求ねの希因がれう希因あとと仰  
すらやめとの近れあすくされを賣る人のあまよ  
里すととあく 希因全く佛道を賣物とへ  
され盡くわおれおなう今とひく他がむくをそらぶもの  
うへて價のを出づく來るをアせ買ふとひつ一の  
價のあまよとく施へと受取す 聾聾の一事と  
かよく却く恩と仇かよ酬ひせずとも集づく立  
き力の大賊あんと乞食すとら被災の事とハ

あり凡ぢへ方故より一心とまつみと形を本持乃  
大きさすす雅俗どもにおかし佛門儒家の教はふ  
もさうあり詩よおも事よおもくの心とてすと  
く思ひ邪あらばんとを欲し人乃く坐の道よ居リ  
めせりもありあれを他の短を誇りむよう已う派を顧  
已う身を躋るもより他の長一やるを譽むことをあら  
さまとがのけり師草紙みかけあわおのう短を顧  
／＼漫りよ先人と競戦一晩学を駆まくおに一家  
とあまぞとくア、勝斗をうなが向とする天地の冥感と  
恐れす後世乃指笑を耻ざことやあひとい言へ語口よ

あひりよ却万才愚者の耳目と薦めんとも  
ほの益あらせ

山船のまよりそらくわゆ

他日材云一船みだりあれかきう論要、古美  
きよによ俳諧の名をあやまかりて軽といふあ  
ありとあきやの所以何事とふや

僕亦少ゆうりりく所のあきよとすのありゆよ  
かれいまと客氣消え見識までまゆよ皆然  
とくく女踏よ迷ひ一よりたあひよあくときまく  
まよよよまくも俳諧を賣るよも仙居に售

名のまかでこととあらう新集よ希因し比肩乃  
まつりとあへてあす今あちねえと座下よなと  
はとせんと口もととしあれ安樂の熱よ犯  
されともあれどまのすいもふ譲言安堵せんもたる  
鳴呼ふ席攻撃の刑及くされりケモソ  
考あし家又天命のそざるああくと自ほもと  
とねへうあすにケ歌の名の道名あると知くあれと  
度トよ棄あり深く御階のあえとおまく十  
五坪よ易一りて益一六歌の起きやうの  
古より記の中等卷見ます。倭建命の御おとを  
有

の監觴すく毎言抄よ連章の監觴焉に至ナニ代景行天皇  
四十一年日本を東夷征伐の時甲斐國酒井の室すく射はつて  
その間すく其ふへちケ歌のウハ篆書半本ゆく一首  
をれりと云。其ふへちケ歌のウハ篆書半本ゆく一首  
の歌の兩ツよケサマシテウモ上のウと下のウとを  
寄一とふも聯合するもケ歌あり哉れよりオニキ  
四のウあと次オヨは償及す時也と云ふて是也  
がよ五十韻る韻あと附合セドリケ歌といふもの。  
唐で空みもふひととあり今能階といふの音押の  
よと連もより出るやの理也滑稽よモとく里  
子詩歌連化と云連詩の源よ極まり大段の  
は式目本の莊夷吉暦いの捉まくも皆連歌よ便

正す代略セ一きのと持主にて諸ふの未よ日蓮  
一家牛牛れうそト 蓮家の職由ミトヨミとあらも妻ニ本寺  
ミの一事はあれハ是家とも名く「さんとさうは」  
名ち天台宗よ混まツ又お跡と後く彼ち一心之  
觀をゆど一此と口稱其目と是もすれひ職由  
とよ活らおアタハども門の趣よ差おあり故よ  
作の某名と異す行歌も連歌も仰詔より職とし  
ゆふやあす加歌の送あれども作の歌す差  
ふありく行歌や行歌連歌や連歌仰詔也  
とあまり味増も大豆豆腐もあす 大豆まれて既

豆腐とありおそれ故とひとの大豆とも名ケム  
さふと今復大う妄量と豆腐、大豆の腐アリ  
されら豆腐と名づく誤りあり大豆とを互い  
と云フシト一 あに豆あづんやあーく詠説と云  
事と云ふニつありす人の詠説也 人、各別ノシコモ  
孔門下生の詠説也 世間一ノトナリコモ  
ノトナリ或人の云ふとく 秋日本の言葉も天ふと  
大君國主と國の守郡代と縣司亭主と家の殿  
法もふと牛中下のちあるあこまと今も天止乃  
檀那の二字あくすをせとありーも是れかし

ホの段々支那モレ震旦モニアリモ勝モけモ  
クモカの秦モの程邈モ仰モリモ楷書モと長  
毛モ一モを川モのモよりモ生モニモと捕モまモせモの  
一モカラ万モみわモ竹モ丈モ笑モあモリモ吊モ弔モすモに承  
月モ脈モあモた夏月モ腹モトカ小モ件モタイモ音モふく飯  
よカリモ訓モあモニモ称モと雅俗モともモ用モゆモと令モえ  
せんモかモ原モあモまりモ改モ化モせモと執モ牛モ汗モ汗モ揃モ  
ユニルモの書モとカむモとカ可モトカくモ仇モ俗モの  
名モのモある支那モ震旦モより傳モくモ詛モたモとカ更  
す改モもモとカとカ不モトカ号モとカゆモきモとカトカアリ

おまおふモ一風雅モ又モかうモ詩モかうモも責モ  
「モハ新モよモ久モの俗モの口モ方モ。俗モ諺平話モとカれ  
難モくモよモ詞モとカ責モをカ蓋モすモ」モとカおふ人モ  
庭モハ小モ野モとカ名モとカつモ俗モの口モ先モ取モせモトカ  
詩モ小モ形モふモきモ向モそモと改モまモーモ一モ持モも侍  
也モ與國モの口モ先モ取モれモ四モ道モくモ行モちモ形モとカ和國モの草  
しモ花モすモくモ寫モれモすモ虫モのモ多モをカせモせモせモ  
竹モとカうモのモりモ自モ由モすモとカよモよモうモるモとカあれ  
ウモうモセモよモはモれモふモ侍モなモまモ玉モのモまモかモくモ

奇ふくもあきよすとすらり自然と雲  
上の一踏よ遠きナリにゆニゆを及きととあうね  
並れどり連れりわの川より久留優良又式自岩  
審よち囁ひかひけは度のあくよみあれまと昇  
勝なり身のあことじゆくあくとあくとのよ舊る  
允諧の名角と揃々易行の一門を構へむ  
はち官よ下葛莞のれ多く爰に居る  
三十界をさり回り遊び又董候のれ君と酒  
を廬山乃千尋の地名と屏山ニゆの不淨あり  
をもあれ持てられのといは皮あくとむ持れの

中よ寺の場をのぞみ障をく時食あ鳴いを立あ  
ら論を隣家又裏あ（あタ）わよりまれ賣者とほ  
“大もくへりもべるふとまのとおあり是則安近  
乃職かすく一たの市評より一きの衆議（シテ）まで  
うひうきの船とまのあれへあらへ十省あやと  
ふと所へかの薦門廿五陳のオ一條又允諧の姿  
“お連報の次よまくらむら上の一派よおよて  
一向宗のと口傳ありとてまく口傳よおよて  
祕もすすまわくと手紙と積み習つて業  
すもあくとせのとまの筆にもぞーとしき

おありをうち川はゆのとせり一向宗の下  
品あり食肉帶妻の境界を無む才使の兎駒と  
牽うせらめよと身もあてさす因れ一乘の法門  
かり今俗まの弱部より俗は平祐の境界ニモ地  
才使の劣族と引うせらめくは中みちの内うち  
圓融無尋一毫毫竟の風範ありあり詳口傳が  
蕉門の仰諦もとがくあれと有破一く地門也  
同門の湯もとあれと言傳は北くとりゆと采名  
と仰諦の二また寄りぬと持是又サ五傳のホニ  
傳小よ四鮮み丈記の階梯と引く難也

一七

まと四解は史記をいせんとも司馬遷も一のく  
云出するもあず支仰諦或を仰諦の又あく、佛說  
ふも思ひまの菩薩へれ、も現の時悉達太子のむ  
う一あれと奉しゆゆとやさうれど仰諦の多き  
天竺子もありと曰りそりきりれどに日暮本も  
佛頂盤膝の二禪師外と歩ひと歩やくきり近影  
あくらのやかの胡東の正林寺より強きふ二体禪  
師蓮かくみ吟のる頃まことに全かの連教とも  
見て、ま最もすふなりニ師の法笑あくの天竺の仰  
諦諦音クモノラ俳諧譜ハタハラレイ・タシムコ・ロ・浪笑ナト  
イ・カナルコロ俳諧ツク組來ハコレラコハジヤレト翻訳セラヌ

コレ東都ニテ通俗

スルコトニヤ

山車ふへち彼國の様笑ひ出は

くちあいのれあり もうてらすとゆく 路も見ん。

せキぬ、

經ト  
南ト

あみ

詠観ト  
霧雨ト

トゆく川舟の幸也あく秦の優旃アシ、行謂り笑言

楚の優孟アシ、所謂アシ、徒笑アシやかの崖アシ告アシ言出

の成章ヨリ、詞不窮アシ竭アシ若滑替アシ之吐酒アシ、以アシハがアシ風アシ雨アシありアシ日本イロハの字母アシハ天皇アシのミナ五字アシの體文アシと十

ニの磨アシと合アシ四十アシセアシ多アシあれニ義互倉アシの  
くちあいふとてそろくアシて改アシせ抗アシひあ合アシ

く四箇アシ表アシの悉雲アシ每アシぞに轉生アシすんアシ天皇アシ

よそへ四箇アシも五義アシも含蓄アシす。おつき化謹アシの云  
ハタモトアシあり。例アシて楚語アシ馬アシ之アシ四實アシ。馬アシ之アシ四實アシ。和語アシ加良アシ一方アシの神紙髮アシ。  
上アシの四實アシ。中アシ事アシ蒼韻アシ。書アシふりかく文字格アシ。  
おふれアシ持アシの理アシを照アシ。又徒笑アシ風アシ諫アシの妙アシを史記アシの滑替アシよ書アシ。徒アシひは梵漢アシともよ伽譜アシの名アシ。  
わく故アシく句作アシト生アシらかアシと被アシ矣アシ。被アシ矣アシをたの  
趣アシとすアシてアシわかアシさきより古今集アシの拂階アシすも  
くらあいの笑言アシあれと説アシ。甫尾切削アシを及アシ切  
すく説アシ。一説アシ。优アシ雅アシ戯戯アシ。京川橋アシ。ま  
詔アシ。顔俳アシ。倡アシ。漢書アシも見アシ。且アシ。吹筆アシ。證文アシ

モークム。ゆく蓮門の俳の字に生よりハトウ安  
よ五合のくらあいあきらかの滑稽の虚妄。月在す  
おうしに而れ苦笑。即ちく泥凍ありと要と  
す。又よ天皇の俳諧より抜きたり。勿浦日をふ  
くじハ雲間抄。は諺事のた名と号ひよ中に一俳諧  
ニ詠諧ニ仰諧四滑稽等と云ふ。一清輔も  
奥義抄。論。とも。詠諧のふや取下。俳  
諧の名す。立りぬ。さねと天皇。権輿。と理  
や史記の滑稽より出されども事由。本邦の連歌  
よりとつたり。是種と蓮門の生進詳。又湯辨

せると。一時の画報を拂ふ。而諧の本源よ到  
底。あんや偏屈よ。軒張の多。船にて所修俳諧  
。老後の樂。ことを。或うと自利と。現前のね。  
地主と利他と。すれど。口解かり。と。五偏泥凍の  
接排よ。しく滑稽のを懷。きずれせばの知節  
も。よだの温虮。も。あらへま。す。口あるく間と。あと  
ものふり。ても居。れ。承く。目よ角。す。理屈と。募  
乞額。よ。筋と。ほく。闇諭。よ。及。す。口。言語。湯辨の  
用。毒。毒と。知り。理屈と。ほく。道理と。考く。闇諭  
と。措く。泥凍との。言。鼻。老。の。と。隔て。如と

以て和へ礼と故く第へ心を渡羅錦浦の美と  
僅ふとも破れども温袍のすれとあんま食せハ珍  
五菓の味と飽きとも一瓢の飲の樂ととかく常  
ニ世情の交と觀へと笑言よ魂とねば之猛  
將勇力士もホレと口號とくら馬のりと和け士民匹  
夫もこゝと共むと耕耘の勞とあれどと  
さうかと俳諧からおよしハアシタのよ阿ハル  
墨書きをさみの舟をふへと五七の句より

序 やや不とけもすぬ後輩 乙風

がよも五傷の人をあつまめ内子も世情の物とやれ

一ノ十五

抜け山河江海のありき歴もあき風月のすゝも妻  
萬田祐の仕業まく目の前へ取寄せく併法すると  
さゆふを俳諧と耳よきとものよあへん目子見本  
よのうとお翁のひづやく

耳よき涼さかがく柳れ

彦元

池月坊古くニお召番よ文章とちがふる一唯  
大や虚とのとのをかわすふに序を文房の筆  
俳諧のよとがよろこびとすとぞとぞとぞとぞとぞ  
全く言の筆のよとがよとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
鏡を仰ぐ一也又あや理あり凡丈は貴きとぞ

器中へあらわとく言とあへ一言とがくあと  
通するものあれど國おのへあれとちひおの體  
きに行へれど今よ不行の業とからぬさうと文章  
とすがふるへ大至まとのみの文筋をあらとソノハ  
善あよ砾毛と一又許らよ考の草紙諸の文  
とくがふ一へは歴とすくじ遠へりとんすよ  
する房と毎人の放言あつや既よ文選より身  
漢至魏文體ニ改ヤテヤ古ヤシトおふへ文家ヤシ承  
あすきに我が體を改モとあり次ややの  
家と異すとまよの龍榜を主すと何乃遠

てあるあもあれまから今古和漢ともにお  
傳家と傳家のより教家と教家のより其の  
傳家よれくす簡牘と簡牘の筋内史と内史  
の筋やが賦頃論表註解通俗等おのへ綱領  
相合是も一ふくらへとまとおふへ教家のゆふ  
くも傳家と傳家と文筋頃はとくふりきりと  
拂ふすと筆とあへて流ふの文あくまや  
きと理よ達へとせらばほとりよとせた者かと  
や源氏狭衣伊勢守のわ経於学よ太佐日記  
等やのかきの選集家とのえまやのまほに

あつたと都より和菴家の文章らの於清雅傳  
麗ふりゆ原氏伊勢お侍あとひに至寧閣襍叢  
の語なれども野鄙あきぬと云はれども風流  
放漫の情性おのづり阿久ね殊更於字よ  
士佐日記かくの勢う難言を擗ひすらも無を  
あしらひのあれをすく耳に遠きとありさま  
せ許六丈考の草書とて化文の一體と構一體  
しと亂ふのとくよしと自在よしく諸家  
を縱横よ形と言と墨く意余りと豈ふ凡  
諾家の文ふやの語と積てす章と並び其の

語家によわのひくらありく僧門よ松よと御生  
家詩文ふ官府律令家等佛門よ松くも御家  
禪家松家禪家等れのが仙家医家易ト唐  
敷田う家等よいとよきわのく家言ありく  
泰昌もりがの和菴家の言語よ一ふ流暢清雅  
ゆきをもひよ何年よちうじり難言と簡よくゆく  
平易よゆくよゆかんむとく古来大よ行  
解と貴にものあり許六丈の構へ本れよと  
聖經賢傳詩文官令の家言以律傳禪教禪修の  
語より駿葉禪蘋市井賣買の倍けよりくふ

もくちかをひとつあとかくはせのむちかと基  
で仕事ありとほり一匁と簡短よすかひらむ  
たかやよほくら妙雄寓方説と來められともちく  
便ひあらまし嘉浩と難かんとも又寒このれ  
が一言かの経傳とそくと妙解の解ひ  
よ傳ちよりかに含蓄とあくべくとも人情よ追  
うむえん解くいのちの幸運傳解麻あきのよ  
はすつきにあすは運中の平易あうとあめ佐やる  
雅健ありと取のえまれともお考せよおのれ骨  
と耳によひくあつやあいややのよゆありものと

間りよ考のふと執事より譜徳精微又脩辭  
より速きよ妙を悉ちりあへ知ぬ今之清もう古  
のよ考ゆらりてはくやくよ古のよ考も又  
その後もゆくうきらしのゆりあんとおなと  
後もいまと金輪善とみせり又く漏得詳ひ  
かくはといてもせきと核確あんれども脩辭  
妥貼あんれどいとせきと經ひ人を歎くの二事に  
おもく頃本やの沙よねくもものあく  
考よ詔よりまよきのケルの置集おれの二  
あり蓋一文の字をもくと其本の画あるも

トトロ直ある。うの

おのとせらきかくのあひ海

其汗

他月材古ニ取て書よかといひやまとあひの  
正字をかたどりとひくさのゑとひりよかあひ  
其てふものせよなまどりとひとすもまほの  
式よよりとあへ海<sup>アラシ</sup>よとせよまほと  
せあらせよひたれとあへ土手をまほの祖  
をたいやとあまつよ身事のものかねとせよと  
生すありとむきとんそうの盡あふすやと  
まきりとあとのせよし世話と俗話ハタケと

代<sup>セハ</sup>院とあひ字は舊々あひよくやあひし梅や  
か、そよねとみねとかむよねとまね、殊<sup>シ</sup>よあひむ  
てきすあねや模とツバキと山煙<sup>シマシ</sup>とあれくも山  
ウーとおひて、川井くと後名よく玉けけとし  
あやまちあき<sup>ト</sup>と、いづもあれやの理あひよ似  
とつもさうやとにかれ<sup>シテ</sup>隨<sup>シテ</sup>筆<sup>シテ</sup>書の中<sup>シテ</sup>角<sup>シテ</sup>触<sup>シテ</sup>  
アタカシヨリ<sup>シテ</sup>黒<sup>シテ</sup>滴<sup>シテ</sup>布<sup>シテ</sup>穀<sup>シテ</sup>秋<sup>シテ</sup>雞<sup>シテ</sup>喫<sup>シテ</sup>起<sup>シテ</sup>鳥<sup>シテ</sup>あといづく中<sup>シテ</sup>集<sup>シテ</sup>めき  
せきふまと出せりとにあひにねりちの歌  
集<sup>シテ</sup>かとよく種<sup>シテ</sup>の漢字漢名と並集<sup>シテ</sup>兎  
獣<sup>シテ</sup>すと肆<sup>シテ</sup>とせくつとくよーとね筆

またとて追あへまくに和訓の職守りふと辨  
シテ五加モ唐音ムニと本の字とほく五加  
か本と稱ヘ榮宋の字と唐音ニキトイフとテ  
をほくキクと補ヘテ和心の音と一 ま  
楓叶葉の形蝦蟆の字と似ムハシトキカルテ  
を中略シカヘテといふあるいつまも新  
儀湯いすも後大ノアヤモリ和漢の字互換  
と見シテ祖翁のちかと難ヘ まうもまう宣  
ふしいうせし

鏡末師古ノ河の宣ふとあん手書の歌

集を見たとひてもかのニお召書はあとの文字の  
一章以よ於くら頃、提計とよき、いふるよまと  
あくあい、かく正字を、おれと編ての修辭と  
熟聞とて、ましく龍虎地尾の文盲勝く計、  
ターワリに十乃一二と云ひるのハ九を知れ  
ハぐるやが故言をあたとおやうとくまつ  
巣中よまうのよいきやがくすやがく附合  
よまくまく書ひと擇りともうこの音化と要  
とするやありあとい改く正字とお一歳實に  
あうと前々の運のよつけむ城よかく思ふん

益か一 めよ同まお今の名月とまくと賀  
代乃あふかとと知くもすとて、お撰とかくも  
正字角触とかくも正字がねどもせよ勿猶越逸  
と相叔サニシともおれすとやくちよえ、め。へん  
既よ同まお今の赦免あつてやあうだ。と異字  
同修の禁制あつてを知りて然れども益々等  
の古式や勿論ま考へたるハ前のは馬まくと云  
初入と導く方便門やくらに変化自在か  
りきとばかりさると卷てふと申すとよひす  
ありとまじまきの字によくは詠まとくとまく

より正字をいと改めゆきよひか一 やのへまくよ  
ものと間を費だよあすりよ善益のものうれとせを  
正字あつてしむてくとんあれうとの益ふくとや  
とくらんといふとわいりかと語よとがり人  
いふりと正字と書くやいふ一 相撲と云  
を語字と書くも角触とかき、角觸とかくと  
渴よとおひて點滴とかき、拂觸とかくと  
渴字とおひて布穀喰アヒタをうかきくものや  
相撲の溢觴エキツクを僕底カモトか事又かく松ぬ縫り下  
幕の諸書よ在す一 佛發すと後けり

ありまうれり相撲も角船も鴻字みやあしれす

小説 龍會

あまくねと山根の雨とあらねて雷のよ  
みほしのあらひら山川の傳と祈祀一叶嗟  
く雨と清ふ少くよ寧のよよまうまれとかい  
きくとひよりゑ箇とかき雨と清ふりよ  
まう清とかくあれも和のちんすくおと語り  
やうすわくかれあくれ黒浦のよすくわ  
くふよくあくは簷のさくくも宿間  
の昔の志げくまくも點こ箇くわゆふもとみ  
ま中幸すくも點箇とほくわくり 龍シテ文字ハ目  
ナテモソノトコロ

一ノサニ

ソ趣ニヨリニ格別ニ違フコトアリ タトハ山根トイハ山ノ根ナレトモ  
医書相書ナトニ山根トイハ爾眼ノアイダノクボキトコロ云カコトシヤ  
タ中華ニテ主張ニ字ヲトウドリニモコソニモ用ヒ日本ノ俗ニ北ノ方  
トイヘルニ字ヲ方角ニモ人品ニモ用ルカコトシ此類勝テ計フヘカラス  
予はいくは一より哉のあと猜おさんかれど  
近世の和書を尋ねるやうく方言國字のよりて  
おおむか所へを知ルノ並和の群籍と涉獵並檢  
一ホれと研究自なすト至りさら少動もなし  
粗糲ヌ一既又かん太鳥と布穀とかき喰起テ  
をアスウと譯するトヨミシテのや鳥と絆の  
セキツウ少鳥ち粗糲玉階たり、いよも布穀と  
列みゆ思ふ三月穀雨の候もあまくわゆく

あ空にまし止むとひより布穀とも名り生れ  
や一名鴨鳩一名郭公日本よりよいとまん其形似鶴  
長尾大如鳩帶黃色啼鳴相呼而不相集不能為  
巢と草家の況あまくふく築巣軒あるも此  
日半喜と歎あ詳す評さんと申の布穀  
を日本のかく鳥ふた宣せんとて夢東ふる日本  
のかく鳥は古経に中華の牧母鳥かくと號れ  
また今更かく鳥あるとす寧合さくと益あきと  
ありかんホヤアハハの山中よあまもあくあま  
なまこ付よりとく見ゆるぬせの形や鶴とも大き

フサミ

ト鳩より少く首多く身瘦く嘴灰色口脣淡白く  
黄色と帶ひとす長きとひつゆの尾とあま  
きあらわすにとれり故トヤハシ河本ト止  
くあくをそくにさりく形とも似ぬ夢のあ閑  
字と催したとお甚くす人ねどすと忽ち山むじ  
おう一

人多ふりとめやへやかんあ  
近江中のけののあくまくされと野良鳩とてりよ  
かの民俗は古へり巢もありとせみあよよりくや  
トリともりす一和書よ見ゆうやのカツコタケと

かくよりむくの方言ふにカツコウ鳥といひと音  
俗ハ今ニ郭<sup>コトコト</sup>鶴<sup>タカ</sup>竭<sup>カツ</sup>鼓<sup>カツ</sup>  
卓<sup>ナト</sup>イフナリ  
モリ小附會<sup>セイ</sup>凍<sup>ツ</sup>波<sup>ハ</sup>鳥<sup>トリ</sup>モホルカト一<sup>ト</sup>モ  
ト<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>と寫<sup>ス</sup>のまの訓<sup>クニ</sup>を能<sup>ハシメ</sup>との授<sup>ハシメ</sup>  
古<sup>ト</sup>人<sup>ト</sup>のく<sup>ト</sup>つ<sup>ト</sup>もさ<sup>ト</sup>て日本<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>ん  
モキ再<sup>ハ</sup>アドリ<sup>ハ</sup>ミ<sup>ハ</sup>シ<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>通<sup>ハシメ</sup>す時<sup>ト</sup>序<sup>ハシメ</sup>國博<sup>ト</sup>  
傳<sup>ハシメ</sup>官<sup>ト</sup>モ<sup>ト</sup>石<sup>ト</sup>夷<sup>ハシメ</sup>と<sup>ト</sup>通<sup>ハシメ</sup>す時<sup>ト</sup>序<sup>ハシメ</sup>月令<sup>ト</sup>  
義<sup>ト</sup>の鞍<sup>ト</sup>春<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>之<sup>ト</sup>は<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>よ<sup>ト</sup>人<sup>ト</sup>アリ又<sup>ハ</sup>割<sup>ハシメ</sup>餅<sup>ト</sup>  
焦<sup>ハシメ</sup>を<sup>ト</sup>い<sup>ハシメ</sup>せ<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>人<sup>ト</sup>アリ又<sup>ハ</sup>割<sup>ハシメ</sup>餅<sup>ト</sup>  
えい<sup>ト</sup>持<sup>ト</sup>り<sup>ハシメ</sup>人<sup>ト</sup>アリちう山<sup>ト</sup>の棺<sup>ト</sup>遺<sup>ハシメ</sup>蒙<sup>ハシメ</sup>あ<sup>ハシメ</sup>

一ノ世<sup>ハシメ</sup>ハ

山海經の鷦<sup>ヨウ</sup>鷯<sup>ヨウ</sup>を<sup>ト</sup>久<sup>ヒ</sup>いと<sup>ハシメ</sup>と<sup>ト</sup>釋<sup>ハシメ</sup>セ<sup>ト</sup>山海經の  
鷦<sup>ヨウ</sup>鷯<sup>ヨウ</sup>也<sup>ト</sup>蘋<sup>ヒラ</sup>草<sup>ト</sup>山<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>解<sup>ハシメ</sup>あ<sup>ハシメ</sup>人<sup>ト</sup>又<sup>ハ</sup>刑<sup>ハシメ</sup>害<sup>ハシメ</sup>乃  
大<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>ハシメ</sup>ん<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>か<sup>ト</sup>異<sup>ハシメ</sup>況<sup>ハシメ</sup>詮<sup>ハシメ</sup>詮<sup>ハシメ</sup>也<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>山<sup>ト</sup>業<sup>ト</sup>  
祀<sup>ハシメ</sup>不<sup>ト</sup>見<sup>ハシメ</sup>也<sup>ト</sup>其<sup>ト</sup>祀<sup>ハシメ</sup>鳥<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>つ<sup>ト</sup>れ<sup>ハシメ</sup>也<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>或<sup>ハシメ</sup>ら<sup>ト</sup>又<sup>ハ</sup>吉<sup>ハシメ</sup>利<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>久<sup>ヒ</sup>い<sup>ハシメ</sup>す<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>り<sup>ハシメ</sup>山<sup>ト</sup>委<sup>ハシメ</sup>也<sup>ト</sup>今<sup>ト</sup>  
の<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>嗚<sup>ハシメ</sup>也<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>ハシメ</sup>す<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>仰<sup>ハシメ</sup>也<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>仰<sup>ハシメ</sup>也<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>而<sup>ハシメ</sup>之<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>全<sup>ハシメ</sup>ト<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>ハシメ</sup>ん<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>嘆<sup>ハシメ</sup>起<sup>ハシメ</sup>也<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>鷦<sup>ヨウ</sup>鷯<sup>ヨウ</sup>の<sup>ト</sup>  
種<sup>ハシメ</sup>ふ<sup>ト</sup>よ<sup>ト</sup>々<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>鷦<sup>ヨウ</sup>鷯<sup>ヨウ</sup>方<sup>ト</sup>か<sup>ト</sup>見<sup>ハシメ</sup>也<sup>ト</sup>鷦<sup>ヨウ</sup>鷯<sup>ヨウ</sup>種<sup>ハシメ</sup>の<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>く<sup>ト</sup>和<sup>ハシメ</sup>名<sup>ハシメ</sup>よ<sup>ト</sup>白<sup>ハシメ</sup>鷦<sup>ヨウ</sup>鷯<sup>ヨウ</sup>鷦<sup>ヨウ</sup>鷯<sup>ヨウ</sup>小<sup>ト</sup>隼<sup>ト</sup>

三ツハ ツミ。キサギムシライ  
鬼鶴 雀鶴 雀誠喰起鳥 ひとえりと古人の説  
あれにて垂下す。捨ム。鶴のお祖としくわに  
ともに甚一き翫體あへりや梅もとた喰起鳥  
ウ形杜鵑又似く混り居す。といふうのをハ  
うぐいすとせつ。かわい。あきなとかかふけ  
ふみある。あまとどをか集めく一つ。よかふけ  
ノリれきり。新よ晚學と迷つまくより。日を  
一ノきかんこ鳥。鷹すくまき。まきのなり  
とた序のよき。いづへす。いじ。御製  
選集すもくく用ひるい。一をく。黄毛一

多らすり鶴とふ川けて。中暮のをも詠。脊夷鶴色  
後陰白立東後鳴とやされと日本。の寫より。前  
大。の。一。翌。おみとあく。鶴の慷慨。用ひ。唐経よ  
至り。とく。の。鶴。流。序。遠。書。章。の。黄。を。一。夢。而。一。鶴。  
賞す。き。鶴。和。漢。わ。一。これ。の。と。や。形。状。は。大。の。異  
か。と。し。皇。和。の。風。鶴。よ。あ。こ。う。り。ん。と。其。ま。わ。と。め  
掌。や。又。あ。ひ。た。と。一。一。 ゆか尼  
哉。れ。と。と。に。中。暮。く。流。り。く。片。鶴。と。弘。め。ぬ。つ。布  
穀。と。と。喰。起。鳥。よ。寺。道。と。代。宿。と。通。す。よ  
す。ま。旅。一。日。本。巡。の。う。ら。く。て。と。ま。ま。の。あ。

ウタハシカレウ著述をあらへ考ふよ中暮カヲ  
けり側楷の名と要より申す事ト一きゝこと  
の名よセ廻行ヨシハシ といひアと云ふを却く布設  
喚起多ふと中暮の名を字面とおんづる事  
のみよとしよ男文女文よのれあく筆隸楷  
草等の品とあ海舶來の文字あれど中暮  
を擬す所もよとおも一也忽ち宝慶約マリ丸  
盆アタマ天家伊達鉄筋淨海理松のハルを八重櫛  
柵カナフと日本めケふ文よとやのまことに取ハセりあ  
あれ東北と於朝船尾の入育とぞいづとがく

幕加のあ朝よそ風カク一も準纏の立タチと  
あ一あれ上よりよそカクアレシキと考氣消せば  
見識シテはまむ寧カミナリかくカクアラム久クニ晴陽乃  
學ノウと悉ハシマトアリ久クニ年有三十サン寛延庚午  
辰五月廿八再と浪基ナガキより表ヒサシ一も被地ヒツジよ列是  
辛未ハタハタ月二宵浪花ナガハタよ還カムるあらかの學ノウ家カミみ  
朝アサヒアラニ顔カニ華言カニの清雅キヤウかとと鈴カニ  
皇和來歷カニの傍カニ仲カニのよ面大カニよ形カニよと覺カニ  
一書カニを編カニするあらと轉起カニさんと欲カニ一日あり  
筆カニ一勉強カニ一風カニまよカニ風カニよ年カニあり

特の考究は備ひず教部の字書きとむ一及び  
唐譯溝詣熟字五字漢字方言國字の解文  
譯筌和讀トハ説草等の雜書多く竝集め形方  
作用の字面を勿傍如名ふをもく鳥獸虫魚艸木  
のれど陸機黄省傳脚疏より禽經師曠張華段威鷹品獸黃省曾王遵登黃謂  
國屋士魚品黃省傳脚蟹李角傳脚時珍本う牛草極含南芳虎苑魚獮  
通本草本頌陳原鵠本牛本種樹書朱子默齊朱子九病朱子花譜  
省曾本箱品枝搖本花鏡李中註名医別錄三路本花史王世懋卷之花果瓜  
蔬の疏本か弘景本東垣本中立本かの諸山本花服  
器財等にりりくら格本州府縣志のれ雜俎

合璧影聚類書彙元御覽圖會圖彙等書肆  
浪菴の柏原氏京三番の河南氏、尾氏等は併り  
求れどもあ一部の浩翰急すらしく連に閲本さ  
さりとれども其のまゝ讀め讀めて則ち紗羅本  
朝夕の視聽あり、あくま替考本助本其の民学  
に深考本向本之小箱本田玄叔石丈山貝篤信  
松吉達本祖昇本妻臺本伊藤井澤等の端本の  
りりくら門生の體中才珍就本せふ傳寫の草稿本  
も本求め往還研究本とす本子真本を祖末の  
大家本も猶誤りありと放本て持本のあれと全本

すつとせむに渡や予の管見いんう語りあふと  
詰めいんかねと食ふすふとせむと西口牆  
一立ふうてきもの十玉五玉或ハハル五玉  
可名の韓一立きさあめりあ可裁一立きさ  
アリ尋ねんとおの原より達バさふのあつき小拂  
拂はまく度一ぬすをかくかねとむりてされ  
すと客氣はと消せし月纏いと生くもゆく  
凡世術よ術ありとくわゆも震えおらしくす  
大方の君よもられといんとおまく一きと已づ確  
きも顧す一他と途一これととてちくりく

一ノセ

一羽とめぐるよ筋うな一一千行のぬきと揮筆さんと  
すふうとく窓たあがふ方うりとく會歎虫魚艸  
本衣眼器財等のあ名と正名、俗名雅名俗名等  
の差あらタトハ章言指牒とも指子トモ牒ナトモ指児ト  
書伎トモ書敷トモ部面トモ薄面トモ  
表トモカク類ノヤレ脂テ計フヘカラス勿傷せ地やドリと異シ  
ふのふれは厚合の締クルくも和やけづりと  
か牛の詰ふや医療の急務と聞ふとおれや江  
東さんあつてん禁れど江南の陶陽居りかんと  
詣でて南北隔絶のやうりゆ北方のあゆと知  
まつ波多く善背腹あつと并同一中華の

又唐々す。りりうて南北の隔より、物のまうい  
あやまひのもの勘うきまく。セ今年日本ノウチニテモ畿内ノ蜀黍  
畿内ニテ南嚮秦トイヒ畿内ノササガラス北國ニテ秦トイヒ北國ノ蜀黍シ  
秦ヲ畿内ニテ秦トイワカル物名ノ異ナルニト勝テ計ヘカタレ  
況ヤ希里のヒヅ健と陽危一トモ中華ヤ日本、  
あんれ背腹あまこととなしや。モク尽す。又  
中華よ袂雞モリふ鳥也日本也。水雞ツイナとも。日  
本の雀雀ヒドリを中華もまた告ミ。又ヒヌヤ  
可かんと大水雞のニ。日本記すも見て雀雀  
のニ。而モニキ圖書す。依模かねば中と鶴字ヤ  
え捨つてまうわん。又ハモ形狀以用のニ。而モ

一ノ段

格おぬ名のニ。而モ偏傍ヒダリ。大字の品おぬや空  
より時代才うちあれども。初は。よりく中華よふき  
もの。や。中華あり。而因よあきとのあり。或  
々形名同。しき。もの。み。形同。しき。名の。もう。が。の  
名。山。が。山。されど。形。体。の。差。く。名。の。時。代。ゆく  
か。あり。あは。客鳥。よ。あれ。と。く。窮。殲。死。さん  
や。既。よ。中。華。の。窮。日本。の。川。モ。か。り。年の。窮  
ら。中。華。の。指。窮。す。と。中。華。の。指。窮。年。の。窮  
か。り。年の。け。り。そ。そ。中。華。の。指。窮。年。の。窮

り口牛の水萸ミツヅギ ふく口牛の雞頭キノコ 中毒の雞冠  
花中毒の杜トリ あき中毒の日本ニホン の數裏ヤブノカラガ 荷 すく日本ニホン の  
鮭サケ あき中毒の花中毒の白魚シロヌカ 日本ニホン の  
鮭サケ ふく口日本ニホン の白魚シロヌカ 中毒の臉殃魚マツタツ まの異  
名モノナカニ 中毒シロヌカ あり かくのとまのれ猿マカラン と村  
こくコク がふ古来漢名和名ハラフネイ わる生マタタク 味ミツ  
を今や即アリ 漢名ハラフネイ く和ハタケ 歌ウタ ひ  
せんとくセントク あくアク の候義マサニ と唐音カタカナ  
のアケウツモアケウツモ うよかくウヨカク 国カントク とす蓋カバ ふき  
すもかくスモカク 神カミ のあら日アラヒ よあらあアラア 魂アソラ 中毒シロヌカ

一集アソト され是下アシモト のあら日アラヒ を失アリ ひのちみを急アハハ いのちみを急アハハ いのち  
の大澤アシモト は陥アリ りたかよつと殊アリ に是下アシモト の故アリ  
ありと申毒アリ の剪秋羅アシモト を仙翁花アシモトハ といひて嵯峨アシモト  
の仙翁寺アシモトジ より生アリ む四シ 甜角アシモト と真葉アシモト とウツモ濃沟アシモト  
の生葉村アシモト より燒茶飯アシモト をあるし茶アシモト といひ和アシモト  
余良アシモト よりと並アシモト うく甲州アシモト の山沙アシモト 小アシモト 濱名  
酒豆アシモト と遠アシモト の濱名村アシモト とあら歴アシモト のお庵アシモト  
え持アシモト の广迦耶寺アシモト よりテアシモト す方アシモト まつま川アシモト がの  
雪上アシモト より今アシモト も領アシモト いきましす佐平アシモト の印代アシモト  
きアシモト あるアシモト がふと謂アシモト 五アシモト か本アシモト 難アシモト 刻アシモト 木アシモト の利アシモト

のれもが高もありておわ— カのカヘテの利訓乃  
とく順、和を妙よ見、五加の唐音あるといひ、見不  
う和本草すらあられぬまことに後たり發的ふらあれば  
最も日本<sup>カニ</sup>の楓々中<sup>カニ</sup>の機樹かう菊も本<sup>カニ</sup>、  
鞠とかくつきあれと中<sup>カニ</sup>も日本<sup>カニ</sup>も造時通修  
古々通用きあり、引<sup>カニ</sup>ひあれ、やわ知教ふあら  
こらもまほあまとあり、楓とか<sup>カニ</sup>とも訓<sup>カニ</sup>、日本  
のツハキ山中<sup>カニ</sup>の山茶花<sup>サザンカ</sup>、日本<sup>カニ</sup>の山茶花<sup>サザンカ</sup>  
中<sup>カニ</sup>の茶梅<sup>カニ</sup>あり、日本のラカツラ<sup>カニ</sup>中<sup>カニ</sup>の楓<sup>カニ</sup>

一〇二

中<sup>カニ</sup>の楓<sup>カニ</sup>の日本<sup>カニ</sup>のか<sup>カニ</sup>とく木草<sup>カニ</sup>  
いちもんく中<sup>カニ</sup>の楓<sup>カニ</sup>の日本<sup>カニ</sup>のツハキ<sup>カニ</sup>あ是<sup>カニ</sup>あ<sup>カニ</sup>故  
やあよそくもかりの下止<sup>カニ</sup>、沈下<sup>カニ</sup>へ  
もくや日落<sup>カニ</sup>ちむけのれい鉢<sup>カニ</sup>彌<sup>カニ</sup>呼<sup>カニ</sup>  
義<sup>カニ</sup>洛<sup>カニ</sup>の會<sup>カニ</sup>ふ及<sup>カニ</sup>リ

明和甲申夏六月

義<sup>カニ</sup>洛<sup>カニ</sup>

故<sup>カニ</sup>藍門<sup>カニ</sup>の諸君<sup>カニ</sup>よ<sup>カニ</sup>も<sup>カニ</sup>羽<sup>カニ</sup>立<sup>カニ</sup>白<sup>カニ</sup>義<sup>カニ</sup>洛<sup>カニ</sup>のま<sup>カニ</sup>ふ<sup>カニ</sup>會<sup>カニ</sup>—<sup>カニ</sup>漢<sup>カニ</sup>  
字<sup>カニ</sup>ふ<sup>カニ</sup>ま<sup>カニ</sup>の正誤<sup>カニ</sup>より<sup>カニ</sup>被<sup>カニ</sup>羽<sup>カニ</sup>の匂<sup>カニ</sup>ふ<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup>倫<sup>カニ</sup>あり<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup>よ  
独<sup>カニ</sup>解<sup>カニ</sup>し<sup>カニ</sup>う<sup>カニ</sup>ニ<sup>カニ</sup>日<sup>カニ</sup>落<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup>あ<sup>カニ</sup>く<sup>カニ</sup>よ<sup>カニ</sup>、<sup>カニ</sup>あれ<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup>あ<sup>カニ</sup>く<sup>カニ</sup>、<sup>カニ</sup>持<sup>カニ</sup>  
ふ<sup>カニ</sup>わ<sup>カニ</sup>も<sup>カニ</sup>む<sup>カニ</sup>ふ<sup>カニ</sup>わ<sup>カニ</sup>も<sup>カニ</sup>ふ<sup>カニ</sup>く<sup>カニ</sup>す<sup>カニ</sup>か<sup>カニ</sup>へ<sup>カニ</sup>り<sup>カニ</sup>お<sup>カニ</sup>—<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup>る  
のと<sup>カニ</sup>—<sup>カニ</sup>も<sup>カニ</sup>のめ<sup>カニ</sup>のす<sup>カニ</sup>り<sup>カニ</sup>よ<sup>カニ</sup>ま<sup>カニ</sup>り<sup>カニ</sup>は<sup>カニ</sup>瑞<sup>カニ</sup>の<sup>カニ</sup>牛<sup>カニ</sup>ぬ

二日論<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup>う<sup>カニ</sup>う<sup>カニ</sup>  
一<sup>カニ</sup>は<sup>カニ</sup>お<sup>カニ</sup>ど<sup>カニ</sup>か  
つ<sup>カニ</sup>様<sup>カニ</sup>に<sup>カニ</sup>さ<sup>カニ</sup>り<sup>カニ</sup>  
ば<sup>カニ</sup>も<sup>カニ</sup>

ホトト。昭和甲申のふり六月  
が扇の雪前よ直教うりの  
一あら江み枝少や乃匂ほと  
それかねよ咸い歌一首もり  
ヒトコトさくよおなぐく

水よ横へ  
わくまく  
縫ふせ

懷の雪は

こちゆる

仲月材

かわく

飼猿のひきくふくやさふの月

東武  
秋戸

一ツ家乃煙と中よしとまれぬ、卷阿

二三三

角ふ似くすのすく宿や暮の事。<sup>ミテス</sup> 柳几  
星合や 四索の持もりくく <sup>高</sup>蝶夢  
雲ノ雪ノあや 級の 大堰川、 山只  
幸ふるすすす川海と、 厚引川、 天池  
小仙よ神山葉をぬあ <sup>ム</sup> ふ  
ぬる唐乃すくも 二二二月 <sup>浪華</sup> 品川  
行教古千葉よりす 梅の木 <sup>大津</sup> 馬明  
帆そくうれきく風や 鮎月、 可風  
ちあくすく持ふる日やかき處葉即、 廉石  
赤牛ア西もたまつよ降上 了東 <sup>モ</sup> 夢浪

竪比はるよ障よのれや 萩蒲草  
さうや蘆あらぐわ 沢せ更ぬ、  
行くまん書め 初音せ しらりき、  
錦ぬきや う朝あく それせすが、  
草鞋の紐よし川むけり けくまん、  
河えの浦、期ちりそと沙干れ、  
内もと宮ほよもむ 放りうれ 尾張成泉  
志のあう盡りありと 翠鶴れ、 馬六  
水の中生れ 海乃ささうれ、 巳人  
まこといやにあらゆ うか水、 蓬阿

耳と鼻とこまかく 四捨れ、 挑  
草薙や 築ひよすむ ましのま、 佳汐  
人格の角、 拂りう サチクふ、 茶ト  
竹とも少や 風すよ 消へばと不れ、 秋十  
埋もれ度ふちかりよ 待ねうれ、 葉月  
鴉ふも月のゆゑううり 香木立、 有菌  
荪のまかすに二ヶ月、 うかみ 吳竹材  
木圓一を御くよちやう 梅の花、 台杯  
物の葉とふりまく葉ふ えさの狀、 可桂

物よりもいれもの臭——ふく、和光  
友波の草ホトトギスすみれの秋、達夫  
冬経や 壱田村よやく秋のあら、坡曉  
涼クマツさわぎ等よしれられはぬ日も、隆五  
翁の雪や竹をうりくも  
傘スルメさる人あくりきまれ、二江  
残葉のあらや あと又一束、一松  
景シテあよ古あたり、さくさく、茱萸  
近づくの耳ふらりとさるなり、里薈  
三日月や 鶴タカさくさく  
の萬葉、山葉

立秋シナフ川とく 立くはく黒うねシナフ 竹小坊  
越シナフと立シナフくや 宮の重鈴シナフ、龜六  
いとくとく立く御シナフ、妻乃柳シナフ、婦加紅  
拘シナフくや 立の房シナフ又花シナフ、後シナフ大中  
引シナフまに立シナフあけすまうどシナフ、前太中  
立シナフわくへひ着シナフく緋シナフの清シナフ、前幾布  
烟シナフや 鶴鶴シナフの尾シナフ、桃嶺  
篠シナフや 芦シナフの尾シナフ、市帆  
琴シナフより立シナフと抱シナフかせこひま、雉仄  
猪シナフよ地シナフかさまく田翁シナフ、杉呂

帆をうらよれとさへす時又のれ、  
ゆきりすと踏もゑぬ是きのれ、  
風波く外へうけむやくかのれ、  
光九  
歳も底くすくありりんふ鳥、  
狹幅の音も中りも川立くれ、  
蘭夫  
夜の音とよぢよかく離れ、  
川宵や水の矢ほきの橋よ候、  
佐秋  
朝くもるるものかくちゑの月、  
徐焉  
人あそに起くもおふり升の雪、  
逸枝  
歸由  
藤谷

紺田もすゝ日暮また雨とくれ、  
止ほやまへ水とくれ、草とくれ、  
人くありよきこすくや里の梅、  
江鳥  
宿きくや秋、くすく房、  
志賀よきと雖乃氣やかまつてよ、  
知十  
猪ふよの鴨も青手、  
乳女も朱くとくはねや松の木、  
文史  
涅槃舎や枝をかくみてふく野、  
萬郎  
わがわくよく里もすこ残り、  
麻父  
外のよにあけみをきおこてあり、  
東起  
蘭草

葛水や やきの筋目の 例のひと、 有葉  
あやめの 少石の原の 草むぎ、 康工  
町へ出く 壁置ふ けや 浦ある、 其丸  
木舟をまち 天とり出や 義の元、 九鳥  
狼うひす見ねとすあき鮭うれ、 立芝  
まきおとこまは峯や ささの秋、 岬邑  
雨と まか京と ぬき障、 鮎の、 僧  
谷川のうれりもあり 梓の多、 トセ  
清士のとも書き代りく 石巻の、 富浪  
柳まくや あ陰のきも日よまくま、 雲洞  
利國

一滴を 稼込む 桐や むづの舟、 可屈  
まくらぐ 新地の出まよぬ千歳、 楚狂  
深め見よ 凡ねらむけふ柳うれ、 翠毛  
袴天と 猛くらまきにかまく、 可夕  
六年よ 今いひ波す いのり、 石丈  
尼寺うきのくまやわくま、 茅くくら、 欣枝  
名月や 柳のやまも 古桂 梅天  
松風の音 乾ひるく 破れ、 其聲

ましとゆすぬりとさうれ、  
ぬれど川風のほんと柳の、  
船舟のえ陣もあり、山さす、  
桂吟や、ぬと乃扇とお、  
挿ぬとすま川もあらぬ、大椿社中  
車馬易や熟柳の風もまづ付、  
かり橋と移舟とありての月、  
月すとくとすと佳節と夕雲雀、  
音をかき水の音とふーりんこよ女、  
王朱毛詠乃仲、そよそよ沙干りぬ、合浦  
咲七

春水とのうみとむ、桂吟、  
虫布」や這ふとこそむと不盡哉、  
ゆはすすむはあらむわるうめ、  
山すくとくちもあらむわらみん、  
ふるみやほりぬくよとすする、  
翡翠の首角あらまつーにまわり、  
をとぼ常や町まつと街のあを、  
叫白衣乃やかふり豚魚け、  
まめの聲やけふねく投りものりか、  
象形如頃まする乃考千路、  
不羊

わくまは看鏡の竹々ありあり。主浦

湖風

稻妻のおさつまや

他的月

落葉のすりぬれ雨ふり。风中、梅洗

持水すりも散々や。甚乃家、芦汀

お箸乃は食あり。山さうす、桃川

風流と立ちて空くも柳くれ。敷浪

向原鳳州

掌や鶴のすり。多乃あくまよ。

波柳

みづやゆき照り。星のれ。盡夕

今瀬崖窓

新歌如きよしの神名のよよゆり、

たまほのもひよし。時のすがれ、

枝橋

絵描ふ寺を笑つてさうる。  
絵らむ。寺裡よ笑ふや室の物、  
恥。以せむ。器量、達さず、純友  
よち産のあよ。冷。まよ秋、  
山寺乃おあす。極やす。砂至るが、  
皆船の満きの。ふをうれ、二旭  
湖くおうま。じうや。鷹乃ま。洞月  
いや。ふよみくよきの。人、いく  
羅と。禪もよみくよきの。人、  
風流のよみくよきの。あいさうふ。僧  
鉢序康

ませとまか第よりて 柳づれ、孤舟  
島乃波まきや、東乃森、羽仙  
る草の日のかくはる涙聲像加賀高橋  
湖さふにあくわうり御月、野井  
帶おぐらぬ粉巾、知耕  
名月や青川をくらへる、鶯の歌、娘兒雀  
静さや障る等とも能月横山、見風  
当代や爲りまく猫のまご、ツタ見風  
美風のありけりよし柳づれ、可朝  
夕影や娘引ひくと唐月、見度

牛のゆや常むすんまゆくま、婦  
物見く被よものあくおや能、風逸  
すくさむ牛の虎のとちのと、た木  
との捕まふまくまく形づれ行脚  
寡くわいくわいのひのひのひ、捨れ金澤風古  
月とあふ浦とくとく落葉の橋、半化坊  
沙とおよりれり、ニウ星暮柳金、可枝  
人よす。町の唐月後川  
笠まさすのナミ名のちく葉のよ、傳説  
裸身すゆまくまく風扇玉川

尾

乃残トモ雪ニシテモヤ遠き事、

迦涼

セ音のふりあひて、吹きしれ、

蘭尾

海棠ヤ、漫遊、リヨ月の月よ拂、

松尾

謝菴

たう」よ前モミタヒ山の形、

麦水

素園

スミハナヒ名の名もく、胸、

婦

すく

えふく、あらゆりけむれと、

女

まハ

外のよや、まよのくと、あみむせ、

日ハ佐のあみお

大權垣

之甫

山橋、あま、

鰐乃

三羽

野

すく

わくまく、妙経の月のゆく、

佛仙

五十四

鳥や、済中、冒く、難整活師、大正寺、  
まくの、後主多や、猫乃衣、紫狐  
かの着や、降り、生のを見ゆ、越前、ミクニ、  
笑けと、作、浮名すと、ちれ、歌川、カガヤ、  
吸く、被も、底も、ほき、歌川、カガヤ、  
ふき、日、京と、川、歌川、カガヤ、  
粗向の、音よ、あき、秋、已文、  
月の、聲の、持ま、あり、も鳥、堤山、  
一家乃、項と、ちるや、持、東枝、似扇  
組、細り、月、はく、はく、川社、  
三思

名月や 船も漕あく 不まく  
常や ちとて うきわす 林庵<sup>武</sup>如水  
旅傍乃へ うせや 故乃風、  
涼<sup>雨</sup>きや うはよ見るさんをわに、  
蝶<sup>琴</sup>よもよ 娘ふ限や 衣配り、  
むふとのう 要もありと 扇<sup>僧</sup>眠市  
晚鐘や 柳よすよ うみよ又、  
波切乃 えきふよ あくろ少捕<sup>吟</sup>流  
猫の子の おひあきぬ 醍一羽、  
手一羽 指<sup>可</sup>隨<sup>右</sup>桃右  
其崩既白 光涼

ちとてや ふのう山<sup>曲</sup>、 緋山<sup>洲</sup>  
あ宿も がくく 築の原モ<sup>起雲</sup>、  
リ葉や うらや木森の山<sup>柳巒</sup>、  
其の音も 遠忌<sup>又</sup>又<sup>以</sup>見れ、  
かくもく<sup>ゆき</sup>やけ<sup>く</sup>く<sup>ゆき</sup>く<sup>く</sup>、  
ゆは<sup>く</sup>く<sup>く</sup>新<sup>新保</sup>、  
ゆくと 柳<sup>多葉</sup>、<sup>浦</sup>、<sup>新保</sup>、<sup>曲</sup>

はの下直笛の歌  
嘴<sup>金</sup>の招<sup>金</sup>に左  
秋<sup>也</sup>、<sup>居<sup>者</sup></sup>及<sup>て</sup>  
ひあくおふき川を<sup>歌</sup>とす

あはやとて あはれとぞ — 山石はくわ、仕候  
あはれや 他生の 鳴く 鳴きしれ、<sup>、毛屋</sup>  
隣りのうかくの音あり 離壁の木 行脚<sup>里東</sup>  
隣りのうかくの音あり 離壁の木 大路  
トトコ ふゆの木のそーめもゆ。  
あぬきまな養ふとのひーと  
おとこやあつやくくねあまと

すくもや ますとの旅あり。 繁花村  
すくもや ますとの旅あり。 見風

下野

あわくゆのうかく そ十日音  
ふくい相の雲うすて音く  
名碑 すも堂めぐらさきやぬうれ  
とまくよ外の裏ふくく わよみれ

雲水僧 舞狂坊  
既白

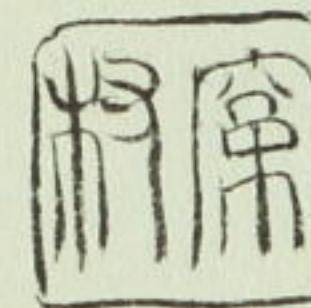
丁四十二

跋

承る日せ年老ひま活者否、方と手すくをひどまきに口  
苦難盡の弱者よ生ひて遠く漢ちの伉谐を、かく傳ふを遣  
強もあに反流の付くや面接口決がゆはよもあを池の水の  
に豁化とて自分をすり泥濘と俳偕とも忽ち落情のおほひ  
れをよほ人の間もあり正處の大裡と仰れびてとむ史記の  
滑稽を傳ふや發うの扱も速うの式と其妻を今四式よひ  
跡も代のく詫をとて正一式を空て折も並ぶ門下の三子  
は授け段の恩はよむかくも就頭をそく本鐸とく重持お取乃  
えとがけて天下の人を疫癒するもと仰ぎ、其をとどひ袋  
をすとひのち。袋も身死する事もあよ一通の盡ひをうける前

五百倍セリ是。すまの黒アリも、あかんもいそとく力とせり。うふ  
（え）やけれよ附礪の軒アキラム池月弓の庭モトウ一凌子、建物  
不吉をか一母糸の貴を維持したが羽衣師乃がれと波で一室一書の  
松と用ひよる爲工減まにかく。津山正の金鷲と生丁サトマヌ  
モハキを破りと毛尾をなんよりふかわせは正庵へたまとこふ  
初夢の惑ひあくらうあらね。詳説やりと遊ふよ似まいかく  
遊ふとも風情かのや我黨へて遊ふものあればあすかひの行司  
すもかホと角力も立つ方比量を負す。小投せんかんとぞあふ  
あふす

南濤涯 己文



一ノ西ノ一

富士山重藏  
義月一赤祐一母生年 繁系坊口譚姫住  
元日二日論 一冊追刻 同前

丙和ニニ酉年十月ナニ日

藤川通佛光寺下町

向南四右衛門

白鶴書林

同

二条通

全小路西入町

野田

上藤

八行叢

